エチオピア駐在員の便り vol.1

富美ちゃんの ラリベラ生活日誌

熊田　富美子（くまだ・ふみこ）
1999 年 7 月から 2002 年 2 月まで赴任
ＦＦＦの初代エチオピア駐在員。英語、現地語が話せなくても支障なく意思疎通をこなす「コミュニケーションの達人」である。現地では主婦や子供相手に手芸教室などを開き、村にとけ込んだ。帰国して数年たつ今もなお「フミコ」を懐かしむ村人は多い。今は福島県須賀川で保育園の園長として頑張っている。1959 年福島県生まれ。

その 1　2000 年 2 月 1 日号掲載

こんにちは！私がエチオオピアのラリベラに暮らすようになって、早 3 ヵ月が過ぎようとしています。

こちらの主食はインジェラという発酵したパンケーキです。これにスパイシーな肉や野菜を添えて食べます。最初来たばかりの頃は、これをちょっと食べただけで胃が固まってしまっていたのですが、慣れというのは恐ろしいですね、今ではなかなかおいしく食べられるようになったのです。 おかげでかなり進んでいたダイエットも、近頃ではめっきり効果がなくなってしまいました。

さて、今私はラリベラの中学校と高校の環境クラブのメンバーと植林プロジェクトに関わっています。村人と共にプロジェクトを推進していくということは、ただ、苗木を渡して植えましょうといった簡単なことではなく、その意識作りが大切です。なぜ自分たちは木を植える必要があるのか、そうすることによって自分たちの環境がどう変わるのか、そういったことをお互い学習することから始まっています。

何か面倒くさそうですが、プロジェクトが終わりました、植林も終わりですとなってしまい、かえってやらないほうが良かった、なんてことになりかねないのです。それに村人の自主的な取り組みがどうしても必要なのです。

「活動の成功失敗は、1 年目で決まる」といったことを、他の活動家の方から伺って、実はえらく緊張しています。一つの試みとして、フー太郎は学生たちに『環境コンクール』を提案しています。今年度は自分たちを取り巻く環境に関するレポートを募集し、優秀な作品を表彰します。来年以降は、研究編だけではなく、実践編のコンクールも加えようかと思っています。

ラリベラで植林ができるのは、年 1 回に限られます。雨季（6 月頃）の直前に苗を植え付け、数ヵ月続く雨に水まきをしてもらい、活着させます。ですから、植え付けの 3 ヵ月くらい前から、苗木の種まきを始めるようです。ラリベラに程近いところの植林状況を視察に行ったとき、2 年ほどでひとつの山が緑に変わっているのを見て、感動しました。とにかく植えれば、荒れ地もここまで回復するのだということがわかりました。私たちにできる規模は小さいですが、村人とともに始めようと思っています。

そうはいうものの、ミーティングひとつとっても、のんびりとしたアフリカンタイムに翻弄されて、おもうように物事が進まないのが現実です。「この仕事をしたら、いくらボーナスを払ってくれるんだ」と言うクラブ担当の先生にも、毎度泣かされています。植林は「フー太郎がやってもらうのではなく、村人たちがやる」のです。この意識を盛り上げるべく、私は学校に日参しています。

その 2　2000 年 4 月 1 日号掲載

こんにちは。英語も現地語も全くわからないという私が、無謀にもプロジェクトを体当たりで進めてから、5 ヵ月になりました。エチオピア人にとって、NGO は『お金持ち』、学校の先生方は『なんとか小遣い稼ぎを…』との考え、そのうえ男尊女卑がまだまだ残っていることも手伝って、ラリベラでのプロジェクトはこちらが思うようには進まず、イライラ。「エチオピア人は初めは、何でもウェルカムだよ」と聞いていたけれども、本当に問題は後から後からやってきて、「話が違うじゃないか」と怒りの日々…。

しかし、現地の方々の協力者のサポートで、どうにか種まきを終えることができ、ホッとしております。1 月上旬には、数年間手つかずだった畑をクラブのメンバー 150 人位で耕しました。始めは手作業でしたが、かなり土が固くなっていたので、農家に頼んで牛で耕してもらいました。そして 1 月中旬には、20m×1.5m の苗床を 20 ブロック作りました。そうしていよいよ 2 月中旬に入ってから、ユーカリやアカシアなどの木の種とともに各種野菜の種を蒔き、その上から草マルチをしました。今は、朝 7 時からと夕方からの 2 回、クラブのメンバーが水まきをローテーションで行っています。私も顔を出し､｢元気に芽を出してね｣と声をかけています。これからブロックごとに木枠を組み、藁で屋根をかけ日よけを作る予定です。

先日、首都アジスアベバの郊外に唯一原生林を残している保護区に視察に行ってきました。100 年以上前に、政府は原生林が無くなることに危機感を感じて、この地区を保護区に指定したのです。しかし人々の木を求めるエネルギーを押えることは出来ず、村に近い保護区には木は全くなく、何と畑になっておりました。そして原生林や 50 年前から植林している地帯ですらも、見事なまでに木がない…。今回すべてを対照的に見ることでわかったことは、単に保護区を指定するだけでは、そして専門家だけの植林だけでは、森林の保護はできないのだということでした。

そんなわけで、『思いが育てば結果は後からついてくる』を信念に、少しでも知っていることを村人と話し合いながら、彼らの取り組む植林が単なる労働ではなく、彼らにとって必要なことであり、楽しいことあるいは自分たちがやりたいことと思って活動してもらえればいいなと、私は考えております。自然相手の作業ですから、これからも発芽は？着根は？と問題は山ほどあります。何とか、クラブメンバーとともに楽しく作業を進めていきたいと思います。応援して下さいね。

その３　2000 年 6 月 1 日号掲載

エチオピアは半年間雨が全く降らず、ひどい乾燥状態でしたが、4 月頃から雨季に入り、5 月の今も続いています。この雨が大地に蓄えられればいいのですが、草木の少ないラリベラ、雨はただただ流れて行ってしまいます。エチオピアの平均気温は、15 度くらい。雨が降ると本当に寒い。ひょうが降って白く積もることもあるのですから…びっくりですね。

3 月に種を蒔いた植林用の木の苗たちは、苗床いっぱいに芽を出しており、約 1cm 位育ちました。キャベツ、人参などの野菜の苗もだいぶ大きくなってきて、クラブメンバーたちも植物の成長をとってもたのしみにしているようです。雨季に入ったので、水やりは乾燥している日だけ行う程度です。クラブメンバーの手で、直射日光や激しい雨から苗を守るために、苗床に木で枠を組み草で屋根を作りました。

このようにして苗床に関しては順調に成長しているのですが、人々の植林に関する意識は、どのように変わったでしょうか。私はラリベラで暮らしていくうちに、活動そのものより大切なことがあることに気付きました。例えば…。

ある日宇宙人がラリベラにやってきて、「われわれは宇宙人だ。君たちの村には木がない。これは地球や宇宙にとっても大問題。さあ、植林しよう。植林したものには褒美をやるぞ」と言いました。宇宙人は村人に植林をさせ、褒美を与え「地球を救った」と大満足で地球を去っていきました。

残されたエチオピア人は「きっと植林は、あの宇宙人たちの仕事なんだ。それなのに俺たちを使って植林したいので、こうして褒美をくれたのに違いない。さあ！ 我々はもう心配ないぞ。どんどん木を使えば、また宇宙人が来て木を植えてくれるし、褒美ももらえるぞ。頑張って木を使おう！ 村は豊かになるぞ」「おー！」……　？？？

この村人たちにとって、この活動は「NGO の仕事を手伝ってやっている」とまるで他人事のよう。
でも本当は、エチオピアの人々が「自分たち自身の問題だ」という意識を持って活動に積極的に取り組むことが、何よりも大切なのではないかしら？と、思う今日この頃です。

その4　2000年8月1日

こんにちは！お元気ですか？ラリベラは少しずつ雨季に入ってきました。天の恵みに感謝しつつ、6月 29 日、クラブのメンバー達は自分で育てたユーカリの苗の一部約 30 本を植林しました。本格的な雨季（7 月中旬頃）には、FFF スタッフが子供たちに呼びかけ、農業省が育苗した多種の苗とを合わせ植林します。さて、新妻さんが 6 月中旬、ラリベラに到着し、村長、教育長、学校長などの方々と大ミーティングを行い、来年度の活動計画を作成しました。来年度は 2 つの小学校、1 つの中・高校の 3 つの学校で活動を進めていくことになりました。

活動範囲が広くなることから FFF エチオピア事務所では、正式スタッフを一般募集、採用試験を行った結果思わぬ人材に恵まれました。新しいスタッフの名前はアベベ・メコンネン。アベベは農業大学卒業後、農業省や NGO などで働いてきた経験者で「エチオピアの環境を良くしたい」と大志を抱いている頼もしい人です。FFF にとって素晴らしいサポーターになると思います。彼なら、将来ラリベラで自分たちの考えで、自分たちのための活動を進めていく力を十分持っていそうです。来年度（2000 年 9 月?）の活動は期待できそうですよ。お楽しみに！

◇ひとこと

日本に 1 年ぶりに帰って感動したことは…

・納豆をたくさん食べたこと
・野菜が豊富
・ご飯がおいしい
・両親が元気だったこと
・友達が変わりなく元気でいたこと

☆買い物をする時、すぐブル（エチオピアの通貨）で換算してしまします。約 130 円で 100 ブル。100 ブルといったら、とっても高価！！心がズキズキ痛みました。

その5　2000年10月1日

エチオピアは 9 月 11 日に 1993 年の新年を迎えました。9 月上旬は日本の暮れと同じで家の掃除、ご馳走作りで店も人も活気があり、どこも賑やかでした。

ラリベラは雨季に降った雨をたっぷりと吸い込んだようで、緑におおわれ、マスカルという黄色い花（エチオピアのお祭りの名前にもなっている代表的な花）が山々に咲き乱れ、溜息が出るほど美しいです。
現地スタッフのヘンノックとアベベが、7 月 8 月の活動報告を次のようにしてくれました。

・ラリベラ中・高校の裏庭に植林を行った。
・政府の農業省から 11 種（うち果物の木 3 種）1380 本の苗木を譲られ、それと合わせて、7 月 12 日 40 名、31 日 54 名の総勢 94 名で植林をした。9 月 9 日には 27 名の生徒で草刈りをし、121 人の参加者全員にノートとペンを配った。

これからエチオピアは乾季に入るので、水やりなどの苗の状態を見ながら、環境クラブの子供たちと一緒に育てていこうと思います。2 人のスタッフは他のプロジェクトについても、花の森予定地の測量やテラスの修理などが終了しており、きちんと仕事をしていたようです。

彼らに花いっぱい運動の鉢を見せると、「素焼きで鍋を作っている婦人たちにすぐに話をしよう」と言ってくれたり、アジスアベバで購入した 15 種の花の種の苗作りに関しても、「後日、今年度活動を進めていくことになっている 3 つの学校の校長先生方と話し合いをしていこう！」「雨季が終わったので、肥料作りを始めよう」と、やる気まんまんです。こうご期待！

その6　2000年12月1日号掲載

皆さんお元気ですか？私は再びラリベラに戻って、早 3ヵ月が過ぎようとしています。こちらは乾季に入り、一面大地を黄色に染めていたマスカルの花もどこかに行ってしまい、また岩だらけの景色に戻ってしまいました。

さて、今回は 9 月から始まった活動の報告をします。学校の環境クラブで行う環境教育･苗作りなどは、専門家のアベベがスタッフになったおかげで、FFF 独自の計画で進めることができるようになりました。アベベの意見で「今年は農業省から苗木を貰って植林するのではなく、クラブメンバーで沢山の種類の木を育て、堆肥作りも行う。それは教育としても大切だしもらってきた苗を植林するのとは興味も楽しみも違ってくると思う」ということで、今アベベは、日々堆肥作りに明け暮れています。 堆肥作りの要領はこんな感じです。地面に 3m×2.5m× 高さ 3m の穴を掘り、そこに小枝、葉、土、牛糞などを重ね、数ヵ月間寝かせる。

しかし、問題もいろいろあります。まず学校の土地は岩盤で、数人の労働者で掘ったがかなり苦労したこと、ラリベラには良い土がないこと、牛糞はそれぞれの家庭で肥料にするため入手しにくいことなどなど。

花いっぱい運動のほうも進んでいます。まず植木鉢は、村で鍋やかまどを焼いている女性たちに見本を見せて、試しに 1 人 2 個ずつ作ってもらいました。それぞれ良い形に仕上がったので、できる範囲で作ってきてもらうことにしました。週を重ねるごとに各自デザインも良くなり、1 週間に 100 個も集まりました。合計 400 個出来上がったところで、植木鉢作りは終了し、あとは花の苗が育つのを楽しみに待ちたいと思います。

手工芸教育の活動は、フェルト製品を作るための羊毛集めからスタート。ラリベラでは羊毛を刈る時期が決まっていて、10 月はじめにようやく手に入れました。エチオピアの羊毛はかなりにおいがきつく、何度も洗わないとお土産には適さないと聞いていましたが、本当にそうで、水の少ないラリベラで、この問題とどう取り組むかなども今後の課題ですね。

何事も初めての試みのときは、あせらず、しっかりやっていきたいと思っています。

その7　2001年2月1日号掲載

あけましておめでとうございます。といっても、今は 1993 年 4 月。

新年も、新世紀も全く関係なく、淡々と日々を過ごしておりますが、1 月 7 日は「ガンナ」といって、エチオピアのクリスマス。1 月 19 日は「ティムカット」というエチオピアの代表的なお祭り日（7 年前、香織さんがエチオピアを訪れ、フー太郎と出会ったのは、このお祭りのときでしたね）で、ラリベラはエチオピア中、世界中から人が集まってくるので、活気に溢れにぎわっています。

さて、活動はどんどん進んでいます。ラリベラでの現在の活動地は、ゲテルゲ小学校、ラリベラ小学校、ラリベラ中・高校の 3 校。各校 1500～2000 人の生徒が在校し、各校 200～300 人の生徒が、環境クラブに参加しています。

ではまず、ゲテルゲ小学校の活動状況。ここの土地はとてもやせているので、全生徒が 2 週間かけ、他から良い土を運び畑を作りました。その後トマト、ニンジン、キャベツ、ビートの種まきをし、1 週間後には日陰を作り、毎朝夕、クラブのメンバーが水やりをしています。

次にラリベラ小学校。ここは以前から校長先生を中心に、農業クラブが畑作業をしていたのですが、畑が小さいので広げる提案をし、とても立派な畑を作りました。そして野菜の種まき、日陰作りが終了し、毎日水まきをしながら野菜が育つのを楽しみに待っています。

同じように、ラリベラ中・高校も前年活動した苗畑の土地はやせていると、新たな場所をクラブメンバーたちで耕し、フェンスを作りました。それぞれの畑で収穫された野菜は販売し、クラブの運営資金として活用する予定です。

また 10 月から作り始めた各学校の堆肥の切返し作業を行ったのですが、とても素晴らしい堆肥土が出来上がっていました。これは鉢に入れ、花いっぱい運動や植林用に使用する予定です。

先日アジスアベバで、12 種類の木の種を買うことができたので、木の種まきの準備は整いました。

手芸教室の活動は、羊毛をすぐに商品化することが難しい、他の毛糸が手に入りにくいということで、「モラ」という綿布を使った手芸を教えようと、サンプルを作りました。これなら布は安く手に入り、女性たちも各家庭で作業できるという利点があります。ラリベラの十字架（銀や真鍮、アルミなどでできている）などを作品に入れて使うと、信仰深い村人も喜びますし、おみやげ品としても大いに需要がありそうです。

この頃、ＦＦＦの存在が村人に知られるようになり、教会や村から「植林や森の保護をしたいのでサポートしてほしい」と要求が来るようになりました。これはＦＦＦの活動が認められてきた現れかしら。とってもうれしいことですね。

その８　2001 年４月１日号掲載

こんにちは。ラリベラは今、気温が最高 30～32 度（日陰で）。いつもは長袖で充分快適に過ごせていましたが、今はじわじわと汗をかくほど暑いです。

先日、実に３ヵ月ぶりに激しい雨が降り、「小雨季到来か？」と思ったら、２日だけでした。それでも乾燥しきっていた大地に降りしきる雨は、植物だけではなく、湿気を求めていた私にも、南京虫たちにとっても、恵みの雨でした。

さて、今年から、村の要望で森林保護のためのガードマンを雇うことにしました。監視する人がいないと、禁止区域でも森に家畜を放牧し、苗木を食べてしまったり、薪にする木を取ったりなどで、あっという間に森がなくなってしまうからです。もちろん村人たち自身で森を守る意識が強くなれば問題ないのですが（実際エチオピアの他の地域では守っているケースもあります）、今はまだ無理。ですので、ガードマンを雇いつつ、将来的継続可能な保護･･･、村人の必要性を満たしつつ、村人が森を守る･･･、に向け話し合っていきたいと思っています。

２月３日、学校での活動は野菜の苗の移植と 16 種の木の種蒔きです。整然と移植された野菜はとっても立派に育っています。しかし、土の中に住む白蟻の問題はなかなか解決しません。先日畑を見学したとき、現地スタッフ・アベベが木の杭を蹴ると、付着していた土がボロッと落ちるとともに、白蟻がゾロゾロ。「科学薬品は絶対使わないよ」といっているのでアベベはなす術がないといった表情。

「私たち日本人が、50 年以上も前から化学薬品を使用し、土が破壊され、その土地で撮れた野菜を食べている私たちや生まれてくる子供たちが、悪い影響を受けていることを私は知っている。虫と薬、どっちが危険だと思う？」といったら、納得してくれたようです。

発展途上国の人々は、先進国の人々と同じようなレベルの生活をしたいと考え、物を欲しがります。その気持ちは充分理解できますが、例えば、私たち日本人は発展に伴う公害や様々な問題も知らされていますが、入ってきたものをそのまま受け入れているエチオピアのような国の人々に危険を説明しても、なかなかわかってもらえないのが実情です。

ＦＦＦでは「生ゴミを肥料にする」活動を進めるため、管理局の同意を得ました。２つの地区で１人ずつ雇って、各家庭の生ゴミを集め肥料を作り、あちこちに散らばっているプラスチック、紙などのごみも拾い集めようと計画しています。プラスチックは処理が難しいので、当分は貯めておくしかないですが、メッセージすることが大切だと思ってます。私たち日本人はある意味で未来人。自分たちの経験を伝え、出来るだけ良い方向に進めるよう一緒に考えていけたらと思っています。

その９　2001 年６月１日号掲載

こんにちは。ラリベラでは、３月上旬から小雨季に入り、４月中旬まで雨が続きました。

昨年は約２週間で雨がストップしてしまいましたから、今年はかなり良い天候といえるでしょうか。

さて、私たちの活動は着実に進んでいます。

12 月に蒔いた野菜の種は、４月下旬の今が収穫の時期。各学校では、食べ頃になると、生徒や先生向けに販売しています。私も先日キャベツ、トマト、

ニンジン、ビートを買いました。その野菜の出来といったら、色つやが良くて大きくて美味しくて、本当に驚きました。

ラリベラでは週 1 回土曜日に大きな市場が開かれ、穀物、野菜、果物、牛やロバ、その他日用品などあらゆるものが売られます（ちなみにこの日を逃してしまうと 1 週間待たなければならない）。

2 年前、初めてラリベラを訪れ、市場で見た野菜はすべてミニチュア版。その時、原因は、土地もやせているし、標高 2600m と高く寒い日も多いから育たないのだろう、そんな風に勝手に解釈していましたが、間違いでしたね。

アベベが考えた有機肥料や害虫駆除の方法（サイザルの汁と灰を混ぜたものや牛の尿などをかけた）は、手間も時間も掛かりましたが、きちんと成果が現れました。

学校で作ったこの有機野菜を農家の人々が見て、化学肥料がないから育たないとか、農薬がないから害虫駆除ができない訳ではないのだ。昔ながらの方法でやれば、ずっと美味しい野菜を作ることができるということを、認識してくださる機会になればいいなと思っています。

2～3 月に蒔いた木の種は、現在 5～6 ㎝に成長しています。先日、様子を見に出掛けたとき、「豆科の木って、豆の生え方と同じように、頭に豆のからをつけて芽が出てくるんだ！」ということを初めて知って感動してしまいました。

手芸教室は、4 月下旬に希望者との初顔合わせがありました。女性 12 人、男性 4 人。最初に公募して締め切った時は、たった一人の希望者だったので、大満足の人数。この日、私たちの目的や販売方法などを説明し、サンプルを見せると、だんだん興味が膨らんでいった様子がわかり、これからが楽しみです。

ラリベラ緑化、美化運動（ゴミを集め堆肥化する）は、3 月から始まっています。

先日、ラリベラ小学校の先生から各団体へと、「ラリベラのゴミ、洗たく汚水などの問題に関するアンケート」が配られました。なんて素敵なタイミング！私とアベベは、かなり真剣な返答をしました。

村人たち自身が、今気づいて、それを行動に移していったら、本当に素晴らしいことですよね。皆さん、ラリベラの人たちに熱いエールを！

その10　2001年8月1日号掲載

こんにちは。ラリベラは大雨季に入って、あたりは緑でいっぱいです。残念ながらそれは草や苔などなのですが、もし今ラリベラを訪れたなら、ここに木がないだなんて思えないことでしょうね。

さて、大雨季にはいった今、ＦＦＦにとって 1 年中で一番忙しく、重要で楽しい時期なので、アベベはこの数週間を「緑の週間」と名づけました。

まず、植林のためのテラス作りや穴掘りを、村人や環境クラブの生徒たちで行いました。「テラス」とは、土止め・保水などのため工夫された工法です。ラリベラ小学校では学校周辺の急斜面に段を作り（約 1000m）、山側に溝を掘り、外側に土を盛り上げてテラスを作りました。土を盛り上げた方に穴を掘り植林するのですが、本当に大変な作業なので、出来上がったテラスを見て驚いてしまいました。

各学校で種蒔きをして育った苗木は、何と総数 3 万 6319 本。現在 7～50 センチくらいにすくすく伸びたこの苗木を、村人、生徒達で植林しています。この他農業省から譲られる苗木を合わせると、約 5 万本が学校周辺と民家に植林される予定です。すべての植林が終わるのは 8 月上旬で、それで「緑の週間」は終了です。

ラリベラの自然環境は厳しく、昨年 7 月に植林した苗木は、1 年後の今、5 分の 1 に減ってしまいました。原因は様々です。それでも活動を続けていくことで木々は確実に増えていくし、子供たちもこれらの活動を通して、自分たちを取り巻く環境について興味を持ついい機会になってくれればと、楽しみは未来へ。

6 月始め、各学校にて、ＦＦＦ主催「自分たちを取り巻く環境」について、作文、詩、絵などによるコンテストを行い、とても良い作品が出展されました。7 月始めに行われた卒業式で、ＦＦＦから授賞者にサッカーボール、スポーツウェアー、ラジオ、絵の具、辞書、バッグなどの商品を配りましたが、バッグを選んだ生徒などは、その場で背負って見せるなど、みんな大喜びでした。

しかし参加者が少なかったので、「作品の出来より、

絵を描いたり考えたりする機会を作ってあげたい」というと、それは無理だという答えが返ってきました。紙、絵の具、ペン、色鉛筆などは、この村で販売されていないので、すべてが高価なもの。子供たちが楽しみで使うには、まだかなり贅沢品なのですね。

今、ＦＦＦの活動はラリベラ村民からも認められ、ラリベラ管理委員会という村の中枢的な機関のメンバーに入れてもらえるようになりました。会議ではＦＦＦの「ラリベラ美化運動」はかなり注目されています。エチオピアは９月から新年が始まります（ユリウス暦）。来年も村人たちと共に活動を進めていきたいと思っています。これからも応援してくださいね。

その11　2001年10月1日号掲載

こんにちは。今年の雨季は雨も多く、気温も以前よりかなり低く感じるエチオピアです。

先日事務所で仕事をしていると、激しい雨は雹に変わり、トタン屋根を叩く物凄い音。驚いて上を見ると、屋根に開いていた小さな釘の穴から雹が降ってきて･･･？！

さて、植林を終えたラリベラに雨の恵みは毎日続き、水の心配もなくひと安心です。学校は７月１日から９月11日まで長期の休みに入りましたが、環境クラブの活動は続いています。

木の苗とともに育てていた一・二年草の花の苗は大きく成長したので、これを以前村の焼き物職人に注文した植木鉢600個に入れて販売しました。この花の販売の目的は、環境クラブの資金作りと、村を花で潤そうというもの。

村人やホテルなどはこの噂を聞きつけると、「いつ頃売るんだ？」と、何度もＦＦＦの事務所を訪れるほど楽しみにしています。花の種はエチオピアでも販売されているのですが、輸入品なので高価だし、手に入りにくいのです。この花の鉢の値段は、村人が求めやすいようにＦＦＦがサポートし、安く販売することにしました。この活動が毎年続いて、村が花でいっぱいになるといいですね。

ところで、5、6月に環境クラブの生徒たちが販売した野菜の売上げは、ゲテルゲ小学校800ブル（約1万円）、ラリベラ高校400ブル（約5千円）、ラリベラ小学校400ブル（約5千円）でした。どうして同じように作ったのに、売上げが倍も違うのか聞いてみたら、ゲテルゲ小学校の校長先生は、野菜の値段を他校より高くつけたり、子供たちに市場で販売させるなど、かなり積極的だったようです。

ＦＦＦは「木を植えることからアフリカの水問題に取り組もう」というテーマでさまざまな活動を進めていますが、実際に上水道の問題にも関わっています。そのひとつが学校に水タンクを作るプロジェクトです。これは外務省の「草の根無償資金供与」を受けて行うものですが、約317万円のお金をいただいています。村ではこの予算の多さに戸惑い、単に学校だけに使ってしまうのはもったいない。学校の水タンクの他に、泉からパイプを引いて、村の多くの人々に水を供給したいと、当初の計画を変更することになりました。

そんなことで、活動は学校に留まらず、村にもかなり食い込んできました。これからは学校の環境クラブを対象とした植林だけではなく、村人のための苗畑を作り、村人を巻き込んで植林を進めようと考えてます。苗畑用の土地を探していますが、村は大変協力的で、車を持たないＦＦＦのために村の中心地から近い河の側の農地を候補に挙げています。これからの活動もますます広がっていくようですね。